

## 短大生と大学生のジェンダー意識の違いと変化

～性役割志向性調査に基づいて～

椿 ますみ

### Changing Gender Awareness of Two Categorized School Students From the Survey at Women's College and Co-Edu Nursing Undergraduate School

Masumi TSUBAKI

#### はじめに

なぜ、大学教育の中でジェンダー教育が必要なのか。社会を構成する人たちの間では「女らしさ」「男らしさ」などの社会通念や、性別カテゴリーからくる性差や性別の特徴の認識・知識が常に支配していて、社会を構築する大きな要因となっている。育った環境、社会の変化によっても個人差がある性役割志向性であるが、ジェンダーに関する知の形成や流通に大きな影響を及ぼしているのが学校教育であり、職場であり、メディアである。その中でも大学教育の中でジェンダーに関する授業を受講する学生の専門性によって、また世代の変化によって、ジェンダー意識（性役割志向性、男女平等観）に相違があるのではないかと思うのも日々学生に接していて感じることである。この際、授業内で行うアンケート調査をもとに考察することはよい機会となり授業の今後の発展のために大いに意義のあることだと思う。

女性学は1900年代後半に紹介された新しい学問分野である。広い分野から関心を持たれるため使用する言葉に学生間で理解の差がある。例えば「男性性」や「女性性」というより「女子力」「男子力」という言葉を使ったほうが学生は理解してくれるし、また出産・子育て・介護などについて「再生産」という言葉を使用すると混乱させてしまい説明が求められる。容易な表現に置き換え、受講生の中には性的悩みを抱える学生も存在するので、使用する言葉に注意しながらデリケートな部分に迫ってみる授業でもある。今回調査対象の一組S大学看護学部には男子学生がいる。女性の専門職と言われる看護の世界に男性が加わることで、男性学の領域<sup>1, 2)</sup>にも触れることができ女子大生のみを対象とする授業に幅と深みが出た気がする。もう一組の調査対象は、女性の特性を生かす職業能力を育成する短大の生活・保育学科の女子のみの受講生である。「女子教育」と言われた時代に、通念や教育理念とされていた性役割分担とは異なるジェンダー観が表れてきていて興味深い。単に性差や男女不平等の不満や不当を学ぶ時間ではなく、様々な性の捉え方、人権に配慮した多様な人間の特徴（個性）としてセクシャリティーを捉える力、広い意味の平等な共生社会を創る力を学ぶ。ジェンダー・フリーの知の形成に役立ち、社会構造を知り、そこで自分が自分らしく生き抜く基礎をつくることができれば、重要な役割を果たす1科目としての在り方の検証ともなるのではないだろうかと思い纏めてみることにした。

## 1. 開講科目について

1960年代後半と1970年代初頭にアメリカ社会に起きた政治の動きは、人種差別撤廃運動や反戦運動などさまざまな社会紛争が下敷きになっていた。その中から女性学・ジェンダー学・フェミニズム研究の学問分野が生まれてきた。ジェンダーの不平等に疑義を持ち女性解放運動の先駆けとなったフェミニズム運動の先駆者達は、当時学生としてこの社会運動に参加していき、それまで男性学者主導で「男の視点」で論じられることの多かった学問領域に異議を唱えたのである<sup>3, 4)</sup>。アメリカから発し、日本の学校教育に女性の視点から社会構造を問い直すこの領域の学問は、1974年に和光大学人文学部にWomen's Studiesの特講として、1996年には初めての女性学専攻の大学院が開設されている。テーマは広く、女性、フェミニズム、ジェンダー、性をめぐる政治学などで、時には女性論、女性の歴史、社会史、女性文学、女性の保健、社会学から思想史、文芸評論、心理学にまで広範囲に人文科学的、社会科学的な科目として現在、どの分野からでもアプローチできるので、どこの大学でも取り上げられ、関係の付属研究所まで備えたところもある。本学では、女性学は学問としてはまだ若く学際的な存在となっている。女子教育に特化してきた女子のみの短期大学部では、「女性論」として、キャリア形成に繋げ得るものとして専門課程の中で早くから存在し、時代や社会を見据え、女性としての人生をデザインする力となる知や考え方を学ぶ時間となってきた。この学問についての取り組み方は教育機関の歴史と教育理念、センスがそのまま表れる。「女性学」「男性学」「フェミニズム」「クイア研究」「ジェンダー研究」いずれの科目名の下で講座を組んでも、正解の無い学際的研究領域なのである。指導する側のジェンダー観も大きく影響するので、教える側としては常に正確な情報収集とニュートラルな態度を心掛けなければならない<sup>5)</sup>。

## 2. 受講の学生について

S大学看護学部（4年制教育、以降看護という）は科目名「ジェンダー論」という。医療分野で働くための基礎教養科目の一つとして選択科目として開講され、受講生の13%が男子学生である。N大学短期大学部（2年制教育、以降短大という）は科目名「女性学」、受講生は女子のみ（11%が2年生）で、選択科目である。

対象の受講生に「結婚、仕事、出産、両立」のキーワードで社会的な性役割志向性を尋ねると、平成30年度履修の看護の学生たちは78%、短大の学生たちは68%が両立しながら働く意思を示し、両学部とも「結婚」を機に仕事を辞めたいとする学生は看護14%、短大18%と共に低く、また「出産」を機に仕事の継続を考え直すと答えたのは両学部ともに50%（平成26年調べでは看護36%、短大82%と差があった。）であった。7～8割の学生が家事と仕事の両立を希望しているのに対し、仕事を中断して同じ職場に戻りたい中断型の働き方を希望する学生は、看護は83%で短大の91%より低かった。いつでも再就職できる国家資格保有者であることが、一度は退職し再就職を考え直したとしても常に求人がある職種であり、また、子育て支援制度の利用しにくい職場であることも原因していると考えられる。仕事と家事の両立は当然の時代が来ており<sup>6-8)</sup>、出産・育児で中断しても、育休・産休、子育て支援の行政・企業両サイドからの社会的サービスの充実、「イクメン」という言葉が生まれたように、男女の性役割の志向

性に変化が出ていることも大きな要因となっている。次の調査から、更に次世代を担う学生たちの性役割志向にどんな変化が起きているか考えてみたい。

### 3. 調査

#### (1) 調査状況

2つの教育形態で採用した2つの調査環境と内容を下表と第2項以下に示す。

調査1：BSRI（ベム・セックス・ロール・インヴェントリ）調査

調査2：ISRO（Inventory of Sex-Role Orientation）調査

	被検者	被検者数		調査日	調査場所
大学生	S 大学看護学部	調査1	77名（うち男子12名）	平成30年4月17日『ジェンダー論』第3講目	S 大学学舎 10号館 10105 教室
		調査2	75名（うち男子8名）	平成30年7月3日『ジェンダー論』第10講目	
短大生	N 大学短期大学部	調査1	62名（女子のみ）	平成30年4月23日『女性学』第4講目	N 大学学舎 南 8号館 403 教室
		調査2	49名（女子のみ）	平成30年7月2日『女性学』第10講目	

#### (2) 調査1：BSRI（ベム・セックス・ロール・インヴェントリ）調査

ジェンダー（社会的な性の役割）問題を考える時、考える尺度として男性的か女性的かという一元的な見方で判断してきた時期が長かった。しかし一方では、一人の人間の中には男性性・

男性性スケール (m度)	女性性スケール (f度)
1. 自分の判断や能力を信じている	1. 従順な
2. 自分の信念を曲げない	2. 明るい
3. 独立心がある	3. はにかみ屋の
4. スポーツマンタイプの	4. 情愛細やかな
5. 自己主張的な	5. おだてにのる
6. 個性が強い	6. 忠実な
7. 自分の意見を押し通す力がある	7. 女性的な
8. 分析的な	8. 同情的な
9. リーダーとしての能力を備えている	9. 困っている人への思いやりがある
10. 危険を冒すことをいとわない	10. 人の気持ちを汲んで理解する
11. 意思決定がすみやかにできる	11. 哀れみ深い
12. 人に頼らないで生きていけると思っている	12. 傷ついた心をすすんで慰める
13. 支配的な	13. 話し方がやさしくておだやかな
14. 男性的な	14. 心が暖かい
15. はっきりした態度がとれる	15. 優しい
16. 積極的な	16. だまされやすい
17. リーダーとして行動する	17. 子どものように純真
18. 個人主義的な	18. ことば遣いのいいいな
19. 競争心のある	19. 子ども好きな
20. 野心的な	20. 温和な

図1 日本語版BSRIスケール

女性性の両方が二次元的に存在するという仮説の下に、Bem, S.L (米、心理学者)により作られた尺度、いわゆるベム性役割目録 (BSRI) があり、ユング心理学では心理的両性具有 (アンドロジニー) とともに分類され利用されてきている。特に前述の看護学・保育学などのキャリアを意識した専門職分野を学ぶ学生達には、興味をもって取り組めるものである。この調査の信頼性については賛否両論あるものの日本語版に対しては肯定的なものが多く<sup>9,10)</sup>、講義「セクシャリティー：らしさ (男らしさ、女らしさ)」の導入部分で実施した。自分の性別と反対の性役割タイプ (ステレオタイプではあるが) がどの程度自分の中に潜在しているのかを知る。性役割タイプと性についての関係性を青年期の学生を対象に実施するのは、受講生自身にとっても講義を進行していく側からも興味深い<sup>11)</sup>。

BSRI日本語版は20の男性性の形容語、20の女性性の形容語、合計40の形容語で構成される性役割スケールである<sup>12)</sup>。両性の役割特性を表す形容語がどの程度自分自身に当てはまるかを、全く当てはまらない、あまり当てはまらない、どちらかと言えば当てはまらない、どちらでもない、少し当てはまる、かなり当てはまる、非常に当てはまる、の7段階評定で回答する。質問ごとに1～7点までの得点となっていて、合計得点範囲で性役割のスケールとなって下位か上位かがわかる。0～46点が下位となる。男性性得点と女性性得点の中央値分割にて性役割タイプに分類し、男性性典型の特性をm尺度、女性性典型とされた特性をf尺度と表示する。使用したBSRI日本語版は図1のようなものである<sup>13, 14)</sup>。

### (3) 調査1の結果と考察

両教育形態の調査1の調査結果の平均値を求め表1に示す。(140点満点)

表1 BSRI調査結果平均値

教育形態		被検者数	男性性 (m度)	女性性 (f度)
短大生	全体 (生活・保育)	66名	61.2	88.7
	女子のみ	65名	69.4	82.9
4大看護学生	男子のみ	12名	77.4	<b>86.9</b>
	全体	77名	70.6	83.5

短大のm度とf度のバランスは4大看護と比較して予測通りf度が高く、女子大教育の資格取得とキャリア形成を希望して集まった女子の特性を示している。注目すべきは表1に示すよ

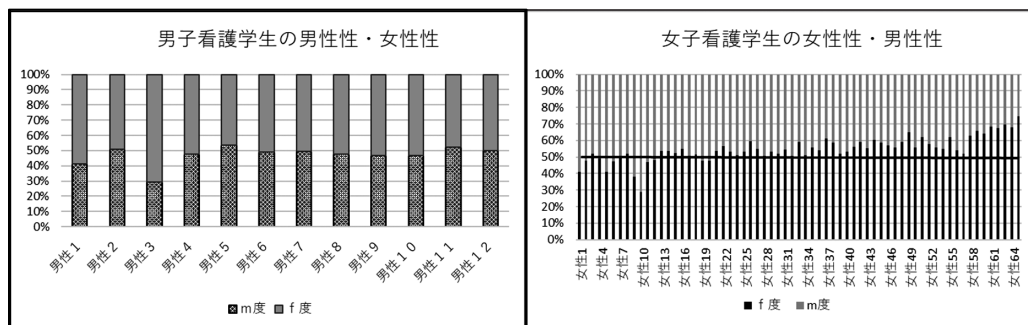


図2男子看護学生 (左) と図3女子看護学生 (右) の男性性・女性性

うに男子看護学生のf度(女性性)の高さである。男子看護学生と女子看護学生を分割して一覧にすると図2、3のようになる。

お茶の水女子大学や奈良女子大学などで、平成31年度からの入学条件の性別に、性自認が女性の場合も受け入れられるようになり、性の多様性を認める時代が始まったというのに、女性学(ジェンダー論)内のアンケート調査に性別欄を設けるには抵抗があったが、男子学生の回答に注目したいがために(生物学的・解剖学的)性別欄を設けた。図2はその結果のm度f度の割合の比較グラフである。読み取れることは、男性3を除き女性性を備えた男子学生が多いということである。表1にもあるように140点満点中の看護を学ぶ男子学生の平均f度は86.9と、82.9の女子看護学生よりも高いのである。かつては女性の特性を生かした職場とされた看護の世界に足を踏み入れようとする男性の特徴なのだろうか。看護の世界といってもそのイメージは戦後大きく変わった。看護は献身と忍耐、伝統的な女性の役割の延長線上にあり、医師に従属するものとして扱われた時代から、近年は医療の高度化や看護職の地位の向上などを背景に4年制大学で学び国家資格試験を受けるものが増え、平成26年調べでは全体の38.6%となっている。<sup>15~17)</sup> 知と技術と人間性、主体性を持った医療従事者としての資質の高さも求められるようになったこともある。看護職は同一労働同一賃金が保証され可視化された男女平等の職業のひとつである。f度の高い男性の選ぶ職業なのであろうか。在学中にユングのいう男性的な強さが統合された女性性が獲得されるのであろうか。図3は女子看護学生のf度m度割合の比較グラフである。女子学生1~10はf度がm度を上回るが、残りの女子学生についてはm度がf度を上回る。発言力、実行力を得て男性性を獲得した結果なのであろうか。原田<sup>18)</sup>は「女子力男子」という言葉で『ゆとり・さとり世代』の男女を問わない若者の中性化を指摘する。「男は男らしく、女は女らしくあれ」というジェンダー(性差)を重んじる社会的抑圧が年々減って、経済が成熟した調和型の社会において、女性は男性に経済力を求めなくなり、調和を重視する女性型の社会に向かっていると指摘する。男性も女性も情報を無抵抗に受容できるソーシャルネットワークなどの普及の中で、性の中性化が始まっているとも示唆する。看護の世界の男子のみの傾向ではないようだ。心理的両性具有型の個人(男性性も女性性も併せ持つ人)は、ジェンダー・アイデンティティが確立されているので、両性的なものを両立させ、男女平等を肯定する平等主義的態度を持つと考えられる。<sup>15、19、20)</sup>

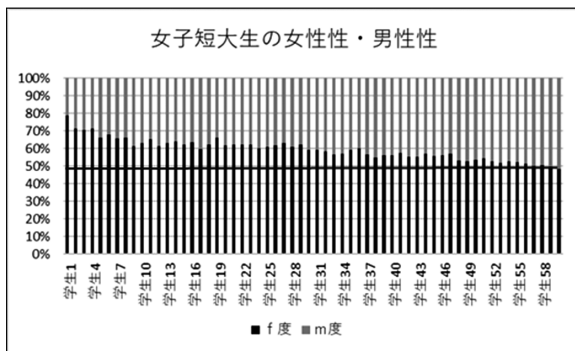


図4 短大女子学生の女性性・男性性

図4は短期大学部女子学生の同尺度のf度m度割合の比較を示す。女子短大生については学生1~58までがm度f度が同等かf度が上回り、比率にすると女子に典型とされる特性を示す学生が96%を占めることになり、女子短期大学部の目指す女子の職能を養成する養成校の教育ポリシーとが一致する。しかし2割に当たる学生48~60はf度m度が同等かm度のほうが上回る。ここでも原田<sup>18)</sup>の指摘する女子の中性化も始まっているということなのだろうか。

#### (4) 調査2：ISRO (Inventory of Sex-Role Orientation) 調査

男女の役割の固定観念が薄れつつある今、過去には女性の特性を生かした典型的な労働とされた職種である看護職への男性の参加が著しい。(平成26年調べで全体の7.3%) まだ頭で理解していてもその行動が過去から受け継がれ伝統的な性役割志向を持つ青年期の男女が、共に学び、有資格者となった暁には、その分野でジェンダーの縛りや生きにくさなどを認識し克服しなければならないのだ。男子女子双方の関係を、社会的にも経済的にも政治的にもイコルな関係に維持していくことが果たしてできるのだろうか。前述調査1はBSRIを日本語版として改良した男女のもつ男性性・女性性の尺度であったが、さらに性役割の志向性を測定する尺度を、Dreyer, D.A.ら<sup>21)</sup> が作成したInventory of Sex-Role Orientation (ISRO) を使って、社会・経済・政治・家庭における男女の役割志向性を調べる。Dreyerは、男女平等へと時代が向かっていても、伝統的な性役割志向を持つ、とりわけ性の行動は古い世代から受け継がれた習慣や慣例によって影響を受けると主張する。この調査は、講義『仕事とジェンダー、ワークライフバランス』というテーマの下に実施した。

質問は16項目からなり、各項目について非常に賛成、やや賛成、どちらでもない、やや賛成、非常に反対の5段階評定で、合計が16点から80点の範囲である。採点コードに沿って得点を求める形式の質問紙である。得点が高いほど性別役割分担を否定して、平等観が強いこと(ジェンダー・フリー度)を示す。質問は表2の16項目<sup>22)</sup> である。

日本では3. 6. 13. 15. 16などは意見の分かれるところだが、学生が将来を見つめる際に、社会における女性の役割・態度に関する質問ばかりである。

表2 ISROの16の質問

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 女性は家庭の管理にあたるべきであり、企業組織での管理運営は男性に任せておくべきだ</li> <li>2. 女性がキャリアを求めるならば、大方の女性は子どもを持つべきでない</li> <li>3. 母親が働いていると、就学前の児童には害がおよぶことがある</li> <li>4. 仕事を持つということは、自分自身の人生を生きているということだ</li> <li>5. 子どもを産むことが女性の証である</li> <li>6. キャリアを求める女性にとって、出産や育児がその障害になることがあってはならない</li> <li>7. 特別なケースを除き、妻が料理や掃除をやり、夫が家族のために金を稼いでくべきだ</li> <li>8. 女性にも、男性とまったく等しい雇用の機会が与えられるべきである</li> <li>9. 女性は家において、子どもの世話をしている方がずっと幸福である</li> <li>10. 働く母親でも、働いていない母親とまったく同じように、子どもとの間に暖かな安定した関係を確立することはできる</li> <li>11. 女性は自分のキャリアを考えるよりも、まず育児と家事を自分の仕事だと心得るべきである</li> <li>12. 重要な仕事を数々抱えていても、やはり女性の本来いるべき場所は家庭なのである</li> <li>13. 夫が家庭内の雑用を受け持ち、妻が家計をまかなってもいいと思う</li> <li>14. 男でも女でも、同じ仕事に対しては同じ賃金(報酬)が支払われるべきだ</li> <li>15. 妻に働かせて自分は家で子どもの世話をするような男性を尊敬することはできない</li> <li>16. 肉体的な重労働が女性に向かないように、精神的・感情的特質ゆえに女性に向かない仕事もいろいろあるということを女性自身が自覚するべきだ</li> </ol> |
|--|

#### (5) 調査2の結果と考察

グラフでは示さないが、看護の男子学生のISRO調査の平均得点は59.4であった。「男は…、

男なら…、男らしくあれ、」  
 といったたぐいの男性としての  
 ジェンダー規範に従おうと  
 するステレオタイプのプレッ  
 シャーを持つ学生もいれば、  
 80点という高い平等観を備え  
 た学生も男子学生であった。

「授業を受けた後なので平  
 等観を示せる。授業初めの頃なら結果が違っていただかもしれない。」「全項目が当たり前のような気がする。」「自分が男女平等という考えについてどんな立ち位置にいるかが分かった。」「女子の料理は食べたいからなあ・・・。」「点数が高くなかった。昔の固定観念に固執しているところがあるとわかった。」「男は仕事、女は家事の考えでは今の時代生活していけないと思う。」「職種や体格で性差は感じないが、差は考慮しつつ男女の権利や認識を平等にしていきたい。」「性差はあっても助け合っていけばいいと思う。」「男女が平等に働くには大きな壁がある。」「意外とジェンダー・フリーな考えが自分にあるのがわかった。中性的な自分が嬉しい。』以上はこのアンケートを通じて感じたことを自由に書かせた感想の一部である。

図5. 6は女子看護学生、女子短大生のISRO得点を表したものである。双方ともに39、44、46点と下位得点のステレオタイプな性役割志向の女子学生も存在しており、この講座に参加しても、受け継がれてきた性に関する慣例や習慣は簡単には変わるものではないことを示している。

女子看護学生と女子短大生との得点を比較してみると、看護という両性的な要素を求められる専門職に入学当初から覚悟を決めて学ぶ学生と、在学期間にキャリア指導を受けながら、保育職・教育職・事務職・販売職・公務員職に分かれて進路を決めていく短大生との間にジェンダー観や資質に違いがでてくるのは当然である。親が看護師であるという学生もいるが、「ジェンダーと労働」という授業の中で感じるのは、入学当初から女子短大生よりも看護学生の方が、学ぶ姿勢の中に明確なライフプランの輪郭が読み取れることである。性役割指向性という観点からは、看護の学生たちにはジェンダーをこえた心理的な両性具有性を見ることができるといえる。

表3 ISRO（性役割志向性）調査平均得点

教育形態		被検者数	得点（最高80）
女子短大生	全体(生活・保育)	49名	58.5
	女子のみ	67名	62.0
4大看護学生	男子のみ	8名	59.4
	全体	75名	61.7

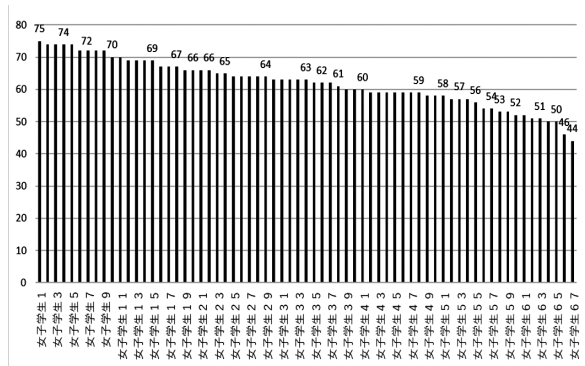


図5 女子看護学生のISRO得点

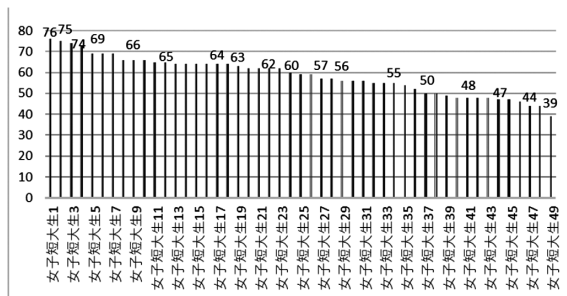


図6 女子短大生のISRO得点

#### 4. まとめ

男が仕事、女は家庭という近代家父長制に固定のジェンダー観が定着して以来、その社会構造は大きく変わり、戦後生まれの祖父母を持つ『ゆとり・さとり』世代の現学生達の性役割指向性を二つの簡単な尺度で測って考察してしまっただが、入学したばかりという18歳・19歳対象に言葉によってジェンダー観を尋ねるといって未分化な要素が多い作業であった。しかし、調査することで発見した新しいジェンダー観、結婚観、家族観、人生観が交錯して現実的な適応と内的な精神性に経験知を加え、制御しながらバランスをとって生きていくのであろう。この調査を纏めるきっかけとなったのは、受講生となる学生のジェンダー観が男女問わず薄れ、両性の典型が見通せなくなり、複雑に交錯した性の感じ方をしている学生の存在があったからである。一生、企業で働くことを囑望する女性がいる一方で、専業主婦志向も顕著に増えている。1986年に施行された男女雇用機会均等法を経て、女性の労働率は高くなったものの、非正規雇用率は男性に比べて高く、男女間の賃金格差がいまだに大きい。働き方の変化で、専業主婦願望を抱く保守的な女子が増えたことも事実だが、一方で男性だけに家庭経済をまかせきりにしない女性のキャリア志向が、バブルジュニア&団塊ジュニア世代となって、新しいトレンドを生み出し、男性と共鳴し合っている。「男は男らしく、女は女らしくあれ」というジェンダー（性差）を重んじる社会的抑圧が年々減っていることも事実である。女子化する男性は、ソーシャルメディアの普及とともに増えているといわれる。原田（2014）は、女子力男子という表現で新しいタイプの男子を表現し、その出現はソーシャルメディアが普及した時期と重なりと指摘する。フェイスブックやインスタグラム（写真を加工してソーシャルメディアで共有するアプリ）を見れば、女子に関する情報が大量に得られ、男性が女性の情報を無抵抗に受容できる時代になっている。ソーシャルメディアの世界は何かを議論し合う男性型のコミュニケーションではなく、共感を促す女性型のコミュニケーションの場となって、男子の女子化を煽っている。

経済や社会制度が成熟した社会では、精神的な豊かさや生活の質を重視するようになり、「コミュニケーションを大事にする」「お互いの価値を認め助あう」といった調和を重視する女性型の社会に向かうといわれる。調和型の成熟社会において、女性は男性に経済力を求めなくなるともいわれている。女子力を身につけ男性が女性化し女性が男性化することは、性においてアイデンティティが確立され、両性化を両立させ、自分らしさを自由に表現できる姿なのである。

共生社会と言いつつも学生たちはいつ反動的な政治の中に、また不平等な世界に放り込まれるかもしれない。しかし、日常生活の中での優しい人間関係の構築に役立つ性の捉え方、人間らしさ自分らしさの捉え方を学び、社会秩序の在り方に常に疑問を持つ習慣を手に入れて欲しい。

#### おわりに

教義は変えられないが、基礎教養として、教育制度のみならず社会の変化、経済、世代間の規範格差、時代とともに変化している学生たちのジェンダー感覚の変化を把握しつつ、教える側としての言葉の選択、態度も塗り替えていかねばならない。性別役割分担について学生の意識調査に論点を当ててきたが、今後彼らが結婚・出産・育児・介護・老後と自分の人生を歩む



時、社会構造や人間関係の質の変化に対応していく『自分らしさ』の発見の上に獲得する正解や規範のないジェンダー観を携え、キャリアパスを伸ばしていける一助となることを願いながら、私も講義のアップデートを続けようと思う。小論を纏めるにあたって、名古屋大学ジェンダーリサーチライブラリーの文献・資料などを利用させていただいた。

## 要 旨

家父長制のもとに「男は仕事」「女は家庭」といった性役割分担が長く定着していたが、現代の変化する結婚観、家族観とともに、男女問わず全ての生き方の規範は薄れ、この20年の間に学内でも、受講する学生たちの性の役割志向に変化を感じるようになってきた。世の中は男女平等に向かい、多様な性も容認していこうという時代がやってきたのだが、伝統的な性役割志向を持つ学生、特に女子学生の行動は、古い世代から受け継がれた習慣や慣例を急には変えることができない現象が捉えられるのも事実である。小論では、短大、4大の授業名「女性学」「ジェンダー論」の中で、様々な性に関する講義テーマに取り組んでいるものの、果たして学生達に届いているのか、また受講生のジェンダー志向はどのように変化しているのか、さらには専攻する専門分野によっての違いがあるのかを探ってみた。受講生の男女の役割観が『ゆとり世代』『さとり世代』を経て『ジェンダーレス世代』に入ってきたともいえるが、学生達が自立の過程で両性を発揮する姿も顕著になってきている。同授業を更に発展させたものとしていく上での一考察としたい講座の纏めである。

## 参考文献

- 1) 伊藤公男、樹村みのり、國信潤子、女性学・男性学、有斐閣アルマ (2002).
- 2) 伊藤公男、新編日本のフェミニズム 男性学、岩波書店 (2009).
- 3) エステル・B・フリードマン、アメリカにおける女性・フェミニズム・ジェンダー研究40年の研究生活をふりかえって、東海ジェンダー研究所 (2018).
- 4) 村田晶子、弓削尚子編、なぜジェンダー教育を大学でおこなうのか 日本と海外の比較から考える、青弓社 (2017).
- 5) 館かおる、学校におけるジェンダー・フリー教育と女性学、日本女性学学会誌、女性学 vol.6, pp8-29(1998).
- 6) 椿ますみ、水谷啓子、アイルランドと日本における仕事と家庭の両立に関する政策、日本国際秘書学会第14回研究大会 (於:日本大学三島校舎) 予稿集 (2005).
- 7) 椿ますみ、短大生のキャリア・デザインに関する支援活動～女性のライフ・バランスを支える、一宮女子短期大学紀要 第45巻, pp71-80 (2006).
- 8) 椿ますみ、仕事と家庭の両立に関する女子短大生の意識と変化、修文大学短期大学部紀要53巻, pp51-57(2014).
- 9) 加藤知加子、BSRI日本語版における性役割タイプの分類 広島県立保健福祉短期大学紀要 4 (1) pp7-11 (1999).
- 10) 泉亜由美、アンドロジニー概念の再考とBSRI妥当性の検討 日本語ジェンダー学会学会誌Vol.5 (2018).
- 11) 江原由美子 ジェンダー秩序 勁草書房 (2001).
- 12) Janet T. Spence & Robert L. Helmreich, Masculinity & femininity : their psychological dimensions, correlates, and antecedents (1979).
- 13) 門脇千恵、佐々木和義、看護系学生の性役割志向性に関する実態調査—同一年地区の学生の比較、神戸市看護大学紀要 Vol.3 pp69-73 (1999)
- 14) BSRI日本語版 (東、990; 東、1991)

- 15) 関根正、奥山貴弘、看護師のアイデンティティに関する文献研究、埼玉県大紀要 8号 pp145-150 (2006).
- 16) 出口陸雄、男性看護師の職務ジェンダー意識と職務満足の関係、日本看護研究学会誌Vol.32 No.4 pp59-65 (2009).
- 17) 山下麻衣、看護婦の歴史 寄り添う専門職の誕生、吉川弘文館、(2017).
- 18) 原田曜平、女子力男子、宝島社、2014.
- 19) スー・アスキュー、キャロル・ロス、堀内かおる訳、男の子は泣かない 学校で作られる男らしさとジェンダー差別解消プログラム、金子書房、(1997).
- 20) 東清和、心理的両性具有-3-PAQ日本語版の検討、早稲田大学教育学部 学術研究Vol.41 pp73-84 (1993).
- 21) Dreyer,D.A. ,Woods,N.F.,& James,S.A., ISRO:A scale to measure sex-role orientation, Sex roles,7 173-182 (1981).
- 22) Index of Sex Role Orientation (ISRO) (Dreyer et al. 1981 ; 東、1984)